

英語教育における ICT 活用の新たな提案

司 会	酒井 英樹 (信州大学) 伊達 正起 (福井大学)
パネリスト	正頭 英和 (立命館小学校) 上田外史彦 (金沢学院大学) 石井 雄隆 (千葉大学・理化学研究所)

現在、学校では ICT が広く普及している。そして、学習者の興味・関心を高め自律性を促すだけでなく、指導を効率化し、言語活動を充実させるなどの ICT の有効性が主張される。その半面、コンピュータ技術に適応できない教員や依存度が高まる教員の不安・ストレスの増大をもたらし、かえって労力・時間・手間がかかるなどのデメリットも指摘されている。とりわけ、知識とスキルの両方の習得が求められ、かつ英語のやり取りの経験を通じた協同学習により学ぶことが主となる英語教育における ICT の活用法については、どうすればよいのかまだ手探り状態だと言えよう。

一方、ICT を活用する際に気をつけるべき点がある。その1つが、「教室内外で学習者が ICT を使うことを目的とするのではなく、教師が設定する狙いを達成するための手段として ICT を活用する」ということである。シンポジウムでは、この点にフォーカスする。そして、単に ICT を使用する際のテクニックや活動例を紹介するのではなく、「教師が学習者にこのような力をつけさせたい、そのためには ICT 活用に対して教師がこう向うべきである」という『ICT 活用による英語教育に対する教師の立ち位置』に焦点をあてる。

この教師の立ち位置について、各パネリストは以下の側面から提案する。

- ・ 正頭氏：小学校における先行的な ICT 活用実践から
- ・ 上田氏：中学校におけるシンプルな ICT 活用実践から
- ・ 石井氏：ICT 活用に関する国内の動向と理論から

そして、パネリストの発表と全体会を通じて、ICT 活用により英語教育に対して従来の教師の立ち位置から変わるべき点や、ICT 活用が広まっても従来の立ち位置と変わらない点・変わるべきでない点を含めながら、これからの英語教育の発展につながるような ICT 活用について、新しい提案をしたい。

「小学校における先進的な ICT 活用実践 —ICT が当たり前になったその先—」

正頭 英和 (立命館小学校)

英語教育と ICT 活用の相性は非常にいいと私は考えています。私は、2012年より英語の授業に ICT を取り入れてきており、様々な実践を行ってきました。その中の一つに、子どもたちに大人気のゲーム「Minecraft」を取り入れたものがあります。この実践は、教育界のノーベル賞といわれる Global Teacher Prize (グローバルティーチャー賞) において、世界150か国、3万人のエントリーの中から日本人小学校教員として初となるトップ10に選出されました。日本ではあまり知られていない賞ではありますが、世界で最も大きな教育の大会で、過去のゲストにはローマ法王やビルゲイツ氏などがいます。

本セッションでは、私が行ってきた英語教育×ICTの取り組みについてお話させていただき、上記のMinecraftを用いた実践の詳細をお話させていただきます。また、今現在取り組んでいるPBL (Project Based Learning) の中身をお話させていただき、そこから見えてきた子どものモチベーションを引き出すポイントなどをお話させていただければと考えております。

「中学校におけるシンプルな ICT 活用実践から」

上田 外史彦 (金沢学院大学)

平成29年及び30年告示の学習指導要領では、小学校外国語活動から高等学校外国語まで、一貫して「英語による言語活動を通して(英語による)コミュニケーションを図る資質・能力を育成する」ことをその目標に掲げている。従って、外国語及び外国語活動の指導に当たっては、その中核を成す活動は「英語による言語活動」でなくてはならないと考える。

一方で、ICTは教師や児童生徒の双方にとって魅力的かつ有効、そして目移りしてしまうくらいに多くの機能を有しているツールである。そのため、授業を計画する際に、つい「この機能を有効に使うための活動を考えてみよう」というようになってしまい、「言語活動をより有益なものにするためのICTの機能活用」ではなく「ICTの機能に寄せた言語活動」となることも懸念される。

そこで、発表者からは、次の3点を意識した提案を行う。

- 1) 育成したい資質・能力に即した言語活動を実現するためのICT活用
- 2) 上記1)を目指した中学校におけるシンプルな実践とその効果
- 3) 実践者としての気づき(発表のまとめ)

国を挙げ、各教科領域の垣根を越えて、学校教育におけるICTの活用を推進している現在、その是非を論ずるまでもなく、長期的には英語教師がICTの知識や活用能力を向上させ子供たちのために有益なカタチを探っていく必要がある中で、誰もが手軽に安心して、その有効性を実感できる活用について紹介したいと考えている。

「初等中等教育のデジタルトランスフォーメーション」

石井 雄隆 (千葉大学・理化学研究所)

本発表前半では、英語教育における ICT 活用を巡る動向を概観する。具体的には「学校における教育の情報化の実態に関する調査」の結果を踏まえ、一人一台端末の整備状況と教員の ICT 活用指導力の現状、「令和の日本型学校教育」で示されている個別最適な学びと協働的な学び、また令和4年度に教職課程に新設される「情報通信技術を活用した教育に関する理論及び方法」で扱われる内容などについて言及する。それらを踏まえた上で、英語教師が ICT 活用を行う際に押さえておきたい理論的枠組みとして技術と関わる教育的 content 知識 (Technological Pedagogical Content Knowledge: TPACK) などを紹介する。後半では、正頭先生、上田先生の実践を踏まえながら、資質・能力を念頭に置いた ICT 活用・教材開発の重要性や、授業のどの場面で何のために ICT を活用するのかという視点から外国語教育における ICT 活用の方向性を検討し、時間の許す範囲で人工知能など先端技術を活用した外国語教育の事例について言及できればと考えている。